諺草　三

和書門 類
二七三五七 號
九〇 函
五 架
七 冊

内閣文庫
和書 類
二七三五七 號
七 冊
二一〇 函
八 架

内閣文庫
番號	和 27357
冊數	7 （3）
函號	210 14

国立公文書館
National Archives of Japan

諺草巻之三

與第十五

婦ヨメが姑シウトメとなる　學範古詩云人命百年能幾何後來新婦今為婆

世ハとしとしをふるび　歌ニ

新古今
ながらへハ又このころやしのばれん　うしとみし世ぞ今ハこひしき　清輔

家集
何のゝしかりき世のことぞしさ(れ)こき　為家

おもひ出ることのはゝよそうつゝこき

新古今
昔ハ家をとゞしのよ人やほうらん　俊成

明治十二年購求

むかしをなにふんすしひし
せうじくさ多し　鶴林玉露曰。古詩云。
人生不滿百。常懷千歲憂。而淵明以五
字盡之曰。世短意常多是也。東坡云。意
長日月促。倒用陶詩
用ゐんハ聽病にせよ　諺乃こゝろハ物をもるに
ねんごろそくる禍にせよと云ことなり　郁離
子云。早思其用。熟思其害。天下之名言也。
耳も用ゐんハ服病にせよと云ことゝ同し

新考

俗語

餘慶　易經坤文言曰。積善之家
有餘慶。今俗に福乃多きを餘慶とい
ふもし云ハんちがへり。餘計しもかくそ
うんりし。
結婚　俗に。夜男乃淫行するを結婚と
云。万葉に云。他國尓結婚尓行而太刀
之緒毛未解者夜曾明家流
よをりゐりをとよ云。枕草子にゐるとも
出たり。

俑

孟子。仲尼曰。始作俑者。其無後乎。爲其象人而用之。書言故事云。倡端不善謂作俑。今俗にも。俑をはじむと云詞にて
に起れり。

尋常　類書纂要。猶言庸常。又詳に。志乃字部によれり

容儀　文選。陸士衡樂府詩云。窈窕多容儀

用心　潘安仁藉田賦。展三時之弘務。致倉廩於盈溢。固堯湯之用心。而存救之要術也。俗に心をくばる事を。用心と云。

慾欲　埃囊抄に。不節の物を貪る事をよくといふと云。此字なるべし。萬葉集に。綺命をも欲する

餘黨　後漢書。羊續傳に出たり

黄泉　万葉集に。黄泉之界とあり。神代巻には黄泉をよもつくにと訓せり。

綸 詩經註云理絲曰綸

幼少 漢書王莽傳成王幼少

正譌

餘饒 物の多きを云。よすん
にようと云ハ誤

太 第十六

諺 大名大耳 東方朔答客難云冕而前旒所以蔽明黈纊充耳所以塞聰張平子東京賦夫君人者黈纊塞耳薛綜註云以黃綿大如丸懸冠兩邊當耳不欲妄聞不急之言也慎子云（慎到所著）不聰不明不能爲王不瞽不聾不能爲公是皆大名ハ大耳と云こゝろ 新考

大行不顧細謹 史記項羽紀樊噲曰大

行不顧細謹大禮不辭小讓

多分につけ　尚書曰三人占則從二人之言左傳欒武子云善鈞從衆　新攷

玉みがゝざれば光なし　學記曰玉不琢不成器人不學不知道　前漢書何武傳曰

大海を手でふせく　以一簣障江河用沒其身又東坡詩集註曰諺有側手障黄河之語類書纂要云張德云以一掌堙江河

楽ハ哀のもとひ　史記淳于髠云樂極則悲　漢武帝秋風辭曰歡樂極兮哀情多　文中子云易樂者必多哀　新攷

寶の山に入てむなしくかへる　蔡虚齋四書蒙引曰所謂入寶山空手回者也

蟷螂　按にこの句いまだ考ず○新考

蟷螂が斧をもつて隆車に向ふ。是は己が分際をしらざる喩に譬之。莊子曰猶蟷螂之怒臂以當車轍則必不勝任

矣 淮南子曰。齊莊公出獵。有螳螂擧足將摶其輪 下畧 文選四十四曰。欲以螳蜋之斧。禦隆車之隧。註云。前有兩足擧之如執斧之象。又史記にも運螳蜋之斧と云諺あり。是皆世諺乃出所之。

大 抵ハたゆまぬこそ乃諺ハおのれの事。功を積久をも絶ゝ來能もべし。速よハ失なきしといふなるあまよ大なりとの心つもりてとまいしん云々。枚乘書曰。泰山之霤穿石。彈極之綆斷幹。水非石之鑽。索非木之鋸。漸靡使之然也。是をもしく〳〵積く。自然よたかる乃喩之。

大 海ハ塵をえらまざれバ 戰國策云。大山不讓土壤。故能成其大。河海不擇細流。故能就其深。

立鳥跡をけがさゞれ 史記樂毅曰。古之君子。交絶不出惡聲。忠臣去國不潔其名。是諺乃意と同し。新考

鷹ハ死ぬれど穂をつまずとかや。含
事也。枕草子に。桃つくりまろりけり。此
流の言ハ義をまもる武士ハたとひ飢に
及ぶ。不義の俸禄をハ受ずと云。李白
詩曰。鳳ハ飢不啄粟。所食唯琅玕。焉能與
群雞。刺促争一餐。世流にいはゞ
薪を抱て火をけすに 戦國策魏孫臣曰。
抱薪而救火也。薪不盡則火不止
たとへにもなるとぞ 太平記云。

上笠置をは没落の時。梢をならす松の風
をも。敵の寄かと肝をけし。末の坂より
立よれ世路されハ。下露のそほつくに。袖
まちほすまもなく。主上の御遷幸とかく。
さしもなく笠置の山を出しより
天が下には隠れ家もなし
藤房卿すごすごと御供して
いかにせんたのむ陰とて立よれば
猶袖ぬらす松の下露

たゝうな雀の人にそまひ　顔氏家訓云。窮鳥入懐。仁人所憫　後こそよ辛つさ鼻うり

蓼くふむし　晋左思魏都賦。蓼蟲忘辛

新考　白氏文集自詠詩云。何異食蓼蟲不知苦是苦　五車韻瑞云。孔叢子。有蓼蟲賦。言是蟲幼長斯蓼。不以為辛。

大富長者　俗にいふ大よふなる人をいふ。後爰よ長者ハ甚しく家乃址もよくたもつ也。是著富農。大賈乃後の孫迄も宅址たもつし。神相全編云。手似如瓠尾。必作大冨長者　天甘了ては大冨人を長者と云。仏書よ見へしと也。

俗語

鍛錬　前漢書。路温舒上疏曰。鍛錬而周内之。後漢書韋彪傳。鍛錬之吏。注云。鍛錬猶成熟也。猶工冶陶鑄鍛錬使之成熟也。今いふ振孫乃字義よく適まろし。

退屈　圓覺經云。無令悪魔及諸外道惱其身心。令生退屈。

退轉 涅盤經云。心無退轉。即便前進ス
圓覺經云。晨夕守護。令不退轉セ
繇麻 作葦乃如し 法華經ニ出たる也
大半 史記項羽紀ニ出たる也。注ニ韋昭云。
凡數三分有二為大半。一為少半
大悦 孟子ニ出たる也。史記亀策傳ニ。大
悦而喜とかけり
大分 漢書百官表。故畧表擧大分。是ハ
大畧の事ニ用ひたる也。今俗ニ多きことを

大分と云ハ違へり
大槩 助語辭云。如大槩則用槩於斗斛
之面叵然一平
大魁 五車韻瑞ニ大魁と連用ニ大字
なる也。今俗ニ拙乃醜なりと大魁と云。
端的 史記魏世家注ニ出たる也。今いふ
慥成の事也之。
邂逅 詩經鄭風。邂逅相遇適我願兮。朱
傳ニ云。邂逅不期而會也とかけり。和訓の

ことはにいへりと
打成一片　朱子曰。如金石絲竹匏土革
木。雖是有許多。却打成一片云々。今い
ふ俗説のことはなるへし。
膽斗　蒙求。姜維膽斗とある蜀志云。世
語曰。維死時。見剖膽如斗大。今俗に。胆
のたき事を膽斗と云。大なる事をいひ
ても可なるへし。
大膽　俗に。勇気のあらきものを大膽者

と云。壘樞論勇篇云。勇士者其肝大以
堅。其膽滿以傍。又千金方。孫思邈云。心
欲小膽欲大。是よりいへるは。俗説の
ことはにいへり。
田作　田を耕すを田作るといふ。中華に
ていふは。前漢書龔遂傳云。齊俗奢
侈好末技不田作。凡田といふは。園に
あるといふをいへり。易蒙引云。西北
方可種五穀之地皆謂之田。南方之人。

指有氷種糴者為田也

溪氣　色に耽りてハ。恥をも志らず欲わハ俗に。俗わりに流まじきを溪氣と云。

斷絶　史記藺秦傳に出たり。李白詩寄君郢中歌。曲罷心斷絶

懦弱　前漢書江充傳。御史大夫貫延懦弱不任職

迋　詩經揚水人實迋女

大老　孟子云。二老者天下之大老也

無頼　史記高祖記に出たり。無聊とも又ふれをしげなしと訓と。李陵答蘇武書に見えたり。注に賈逵國語注に。聊ハ頼也

檀那　善覺要覧云。梵語陀那鉢底。唐言世主。稱檀那者。訛陀爲檀。去鉢底故曰檀那。今俗に主君を檀那と云と。世主と云こゝろ起まつや。始ハ主君を檀那と云ふ事いひしゆゑにせしが。今ハおしなべて俗となりぬ。さまれたんある

人ハこまじわりをし

對揚　詩經ニ云。對揚王休

大畧　孟子滕文公篇ニ云。此其大畧也

大體　史記貨殖傳ニ云。大體如此

大抵　史記荘子傳よ出たり。索隠ニ云。大抵猶言大畧也。又大氏ともかく。史記秦本紀よ出たり。註。猶略也

大要　小學句讀。大要猶言大抵

容易　東方朔傳よ出たり

大慶　易經履象よ出たり

盤桓　易經屯ニ云。初九盤桓。註ニ難進之貌

躊躇 同　字彙ニ住足也。文選謝希逸誄注ニ躊躇行止貌

踟躕 同　詩經ニ愛而不見。搔首踟躕。註ニ行不進也

踉蹡　字彙ニ云行不正貌

無且暮　俗よ。やかんを得るよ。使役なれとも をとゞめうりと云。且ハ旦暮をとりしの略ハ且

を勤るなり。又たんれんの意にも。又且
黽勉と云也。是も同し詞之。

他界(タカイ) 和俗に死ゆる事を云。東鑑十五ニ云。稲毛ノ三郎重成ガ妻於武蔵國ニ他界ス

慥(タシカ) 并葉竹系乃訓之。中庸章句。慥々篤實貌。言行おのつからくはしく然あるを慥々と云。俗語乃たしかと云も此義に通也。

方便(ハウベン) 佛書に出たる字之 はの字部にくはし

譫語(タハコト) 醫書に。多くあるせうと。字彙ニ云。譫ハ多言也。たはことゝ訓するハ。多語言(コト)なるべし

墮落(ダラク) 稍(ヤヽ)落るをおちぶるゝと云。既に落てなきところをハ墮落(ダラク)離別と云。又どらくど
ゐるとなどと云也。言書おほよりつたへ来る。

丹青(ダンセイ) 畫采をかくとこれをたうるしと云へば式字なるべし。

對面(タイメン) 後漢書蔡邕(カ)傳。相見無期。惟是書疏可以對面。

阿那（タツヤカ）　文選南都賦注。善曰。柔弱之貌

達者（タツシヤ）　文選阮元瑜爲曹公與孫權書曰。達者所規。規於未兆。注。向曰。達謂達理者。仲長統樂志論。與達者數子論道講書。是はよく道に達したる者をいへり。今俗に人の健なるを達者と云へは。ことばちかくて

大造（タイザウ）　左傳呂相曰。我有大造于西也。杜預曰。造成也。文選陳孔璋檄文云。有大造於操。注。濟曰。造恩也。有大恩謂救之

今俗に人の恵を受て。大造なりと云は。大恩のことなるへし。又抵の大なるを云时ハ大壯の字なるへし。大壯ハ。易の卦名也。

帯佩（タイハイ）　刀小佩なとの。皆帯佩と云へし。倭俗。太刀。刀を常に帯する故。太刀。刀の恰好をも帯佩と称す。

直人（タヽヒト）　詩經定之方中篇云。匪直也人。よのつねの人はあらさるを云。源氏其外の草子。さて人の中にはすぐれし或凡人をたゞ人ともいへり。

段々　趙小山餞別詩。杯酒陽關段々愁
對談　傳燈録云。維摩與文殊。對談スル何事
怠慢　漢書申屠嘉傳ニ出タリ
滔々　水大貌。書經ニ出タリ
蕩々　水流貌。書經ニ出タリ
退散　梁書云。各退散ス
談議　宋史劉湛傳云。不喜談議
大力　南史蕭摩訶傳云。大力十餘人。俗ニ力者を大力と云。據あり
代々　陸宣公集。代々為國勲臣とあり

借使　史記秦本紀　郷使　同　使　同上　向使　同　史記　籍使　同上　縦使　同上
假令　同　匈奴傳　借令　同　古硯銘　設令　同　為曹洪與魏文帝書　假如　同
韓文　第令　同　史記　假設　同　賈誼傳　藉第　同　漢書陳勝傳
○縦　論語　雖　同上　假　同　韓文　譬　同上　辟　同　中庸　借　同　詩經

正誤

大略たいらくハ誤　探索あなを求るすきを云。俗ニたんざくと云ハ誤

誰たれと。たの字。にごりて　唯さつさ。たんづつれる

りかはろうし　無大事だんない。たるを誤。だいを　鍛錬たんてんと云ハ誤

檀那ハ誤だんなん　大根ハ誤だいこ　狸ハ誤たのき

たりやす　誰奴どいつだいつめ。又誤　為爛云ハ誤　耕そくれると

ハ誤　大布ハ。ふとぬのと云。まくと云なり　試ねをこころむる　揉曲るものを直す

まゆを云べし二　泪混しあし

諺

禮第十七

遼來々　魏志曰。張遼字ハ文遠。鴈門馬邑人。武力過人。數有戰功。累轉前將軍。蒙求舊註曰。江東小兒啼。怖之曰遼來遼來。無不止者。日本にてはむくりこくり小兒を怖すとれうらいくと云ことも。遼來々しと云こときつる。

龍吟ずれば雲起る　易文言曰。雲從龍。淮南子云。龍舉而景雲屬。　王子淵聖

主得賢臣頌。龍興而致雲

零落　楚辞離騒曰。惟草木之零落　朱子注曰草曰零木曰落。朱子の注めいけしいへしとも。落字草句に出は。草の衰るをと俗に。人落ともいへし字彙に注ゆくるまし乃好ちふるをいふもと零落もるといふ。琵琶行門前零落鞍馬稀。元遺山詩。常教零落在蒿萊。又人の衰へしうるをと零落と云。白楽天詩。舊友零落年帰泉

霊験　遊天台山賦。観霊験而遂徂

聊爾　山谷詩。且然聊爾耳　薛文清。五友詩紉香聊爾意徘徊。詩箋云。聊ハ且暑之辞。聊爾しいへりそめよなんをいふ。尓ハ助字なりと。土佐日記に。いさゝかなることをあせぐしとかゝる。今いふまてうしれさこ之。

料理　晋書桓沖傳に出よるとてよりれさむるうこ之。今俗に食物を割烹するを称して料理と云。居家必用に蒟蒻を製するたとびくし料理するとはつまりれ

はらはこゝろよといひはるゝや。

料簡　後漢書に出たり。通鑑集覧云。料ハ度簡ハ選也。又俗に了簡乃字を用ゆ。字彙ニ了ハ曉也。簡ハ選也。若理をさとりえらぶことなるときハ此字を用て然るべし。

錬磨　物をとぐごとし。臨濟録。體究錬磨

歴々　韻會云。爾雅注。歴ハ數也。一々かぞへはかるがごとく分明なるを歴々と云。楞嚴經ニ此歴々地聽者。臨濟録。是箇目前歴々底。

領掌　うけつかさどるの。領承とも書。字彙ニ云。領ハ統理也。承上令下謂之領

領解　心に領掌して解釈するの。又了さとりたがいめはるを。俗に領解違とも云

禮儀　中庸ニ禮儀三百

廉直　後漢書ニ嚴彭祖爲太傅廉直不事

權貴

正諺

鼇等 きいてんぐハおやまう

諺

曽第十八

孫ハ笛ふく　此諺ハ先祖笛をと吹ハ。其子孫亦必笛ふく者阿りと是祖先乃まゝ教子傚ると。國史纂異云。唐閻立本見張僧繇舊畫曰。名下定無虚士。是其意同じき乃を

蘓民將來子孫　今俗符章ニ記しし又諺乃ぬくへとハいふうる之。神代巻指抄ニ。神代外孫とと阿りく云。素戔嗚尊根乃國ニ像

是まての時。雨にうたれ。風にふかれ。辛苦を受し。よろしく宿をとらんと神々へこひしに。諸神ゆるされざるをみて。みさハ乃宿に。蘓民將来。巨旦(コタン)将来といへる兄弟乃者ありて。蘓民ハ。家貧しくありしかども。心情篤厚なり。巨旦ハ富有なりしかども。心情不仁なり。素戔嗚尊。先宿を巨旦乃許へこひ給へど。ことわりしけれバ。蘓民がもとへ行給ひしかバ。しもてなし。且又年来資奔漂なれ

ねんごろに給仕をはくせらる。素戔嗚尊いといたく悦こびたまひし。いよ〳〵てら。恩を謝せんとおぼしめし。其夜はさりて乃ちまうら。某疫鬼来るべし。其式をのがさんとおぼしめ給ほうしめ。そ乃をしへ給ひしめらく。蘓民に告給ふ。其夜は不思議に疫神来りて。ふきんまんきれ亡ぼさるべし。家々に猪を除く方ありて。然るに家々の内に居者ハ。茅(チノ)輪(ワ)を帯(タブ)べし。之

かしこく禍を除き給ふよしなれども。蘇民
命を保ち給ふ事を得果して暴風おこりぬ。
明旦。外乃人民悉く病悩しぬ。或ハ死或
ハ病ぬ。尊。蘇民が昔の宿を。報て後世疫
氣流行せん時。汝が子孫を家門に題し
て。蘇民将来子孫者と書し。且茅輪
を門楣にかくべし。然らバ疫氣乃さ
りなんとまぬかるべしと。世俗。今に門楣
に蘇民将来子孫處とかくハ此故なり

或人の云。蘇民将来。巨旦将来ハ。琉球人なるべし。今ハ越
來ノ親雲上なとゝ名を付く。牛頭天皇蘇民将来乃事。
簠簋内傳にものせたり。備後風土記ニ出たり 新考
出たる事なれハ古くより云つたへたりとみえたり。

粟散邊土 小さき国をいふ。粟散邊地ともいへり。仏
書に出たり。楞嚴經會解温陵ガ曰。粟散郎
小國乃小主。天下に散在する事。粟乃多
きがごとし

俗語

疎遠 史記晉世家に出たり
率爾 論語先進篇に出たり。朱注云。輕
遽之貌

若干（ソコバク）曲禮より出たり。註。若如也。未定之辭。數始於一成於十。干字從一從十。故言若干。謂或如一或如十。凡數之未定者皆可言　漢書食貨志註。師古云。若干且設數之言也。干猶箇也。謂當如此箇數耳。こゝまでは何ともすくとも數をしれぬといふ詞之儀なり。しかれど多きるを若干とはめるは悪し。

背向（ソガヒ）　是ちらのいはれは萬葉集につく

孫乃そばにまゐる詞しをもともあまり。そやし。下部乃詞に。人を賤（イヤシメ）しめてそしり。こやし。そやし。などと云。源氏玉かづらの巻に。そやしくらべて。枕草子に。そやしとりなす。宇治拾遺にも見ゆといへり。皆同じ詞なり。そやつ。そ奴（ヤツ）といふ總語なるべし。

それけよ　又下部のいひならはし詞なり。その故ともいふなり。そのけしと云。是も又ことば

はるを日本紀に春乃字をいはひと訓せり。故
曰ときくこゝろよりいくとあるならし。されば
の二字を反せば。けの字になるべきなれば
それけとはそのあと云ふになれり。孫氏
とのみ云ひし。あをけといへり。

孫（ソン）

[illegible]も人乃苗裔を云ふ事也。也人乃孫を。
俗に人つまだゞに子乃子をいふにはあらず。
左孫乃事 之。按するに。左傳哀公十五
年傳子周公之孫也とあるは。公孫を

を指て云。公孫成は周公乃孫にはあらず。
孫と云ふ事は。俗に後なる紀にもなし。

粗糙（ソサウ） 類書纂要云。物不精細。

啐啄（ソツタク） 禪林寶訓音義云。啐啄。如雞抱卵。小雞欲出以嘴吮聲曰啐。母雞憶出以嘴嗑之曰啄。作家機緣相投而解亦猶是矣。

聰明（ソウメイ） 書經泰誓上に出たり。

倉卒（ソウソツ） いそがはしきを云。漢書平帝紀に出たり。

些（ソコバク） 少しの事也。楚辞に出たり。今俗乃

人の詞の縁をまさなにさるゝさの字
をかくといへば此の字の意とは縁こしの
詞すとぞ。義なし。ふじ流の縁にいふ事と
薩嚩訶 沙婆訶 尤に沈存中筆談に
出たりとぞ。梵語の縁にいふ事ありて。こと義
なし。此三字。右にいひし此の字に入る。
騷 欸林良材云。騷の字を発にぞめ
きとうろゝとぞ。さへいしえんなるとぞ。
五十一 まさしくそれとも乃ぞめきにかくさむ

んともんなるうくしさ
坐 文選陸士衡長歌行云。體澤坐自捐。李
善註云。無故自捐曰坐也。坐とはんな
らずといふ事也。もぞろといふも同じ。
屬託 漢書尹翁歸傳云。翁歸拜東海太
守。廷尉于定國欲屬託邑子。不敢曰。此賢
将不可干以私。後漢書竇融傳云。屬託
郡縣干乱政事。俗に今銀を賞料に
極めて。罪人を募求るを。屬託といふ。聊

の辺に甚らふへき金銀をはかりはようく
けすてうはかりき。是を屬託とかく稼と
云。是は人に金銀を屬託しく。罪人を
捜出さしむるに。其金銀乃ようを。屬
託といふと。俗にはそのへるふうそこさし。

總領 詩經丞民篇註。外則總領諸侯。内
則輔養君德。今俗に嫡子乃事を惣領
といふ。群子弟をおさ領するよしなりん。

齟齬 廣韻云。齟齬不相値也。俗に物乃

そりちがひするほを。齟齬はぬといふ
たゞ齟齬とかく然らん。

彷彿 楚詞遠遊篇云。時彷彿以遥見。朱
子註云。見不定也。彷彿に二義あり。さの字部考ふべし。

庶幾 爾雅。庶幾尚也。疏云。尚謂心所希
望也。俗語乃庶幾とは希望乃義に。

抑 韻會。反語辭。又亦然之辭。又發語之辭。
又疑辭に色用ゆ。古語乃注にみえたり。本邦にも
さる教語乃詞に用ゆ。

蔵六　祖庭事苑曰。雜阿含經云。有亀被野干所得。藏六不出。野干怒而捨去。佛告諸比丘。汝當如亀藏六。自藏六根。魔不得便。野干ハ狐の名。六を蔵るとハ。亀尾あたまあしを甲に引入て藏を云。今俗。亀を縮くまりゐたるといふこと。お座して坐禅するを藏六といふハ。こゝろになつけ也。東坡詩。得如虎挾。失若亀藏六

宗匠　宋會要云。慶暦二年。富弼上言。南省主文者四五人。皆兩制宗匠。今ハ藝乃まさる人を宗匠といふ。

忽々　又怱しとも書。晉書衛恒傳。怱々不暇草。廣韻遽也。又速也。杜詩。告別莫怱々。今ハ札乃往来にいそかしくてん略を述る時。あらくと書。怱々と書くこともあり。

踈畧　漢書司馬遷傳。踈畧甚多

贓物　又下學集ニ。贓物ハ盗物也。字彙云。贓

吏受賄也。凡非理所得財賄皆曰贓。と
道にはづる財ハ。盗物に限べからずと。

奏（ソウ）

とは臣下よりして。天子に申すを。奏
と云。奏聞。御奏なと云なり。日本に
ては同し。俗に。奏者とは。[illegible]の主
なる人へ事を申入る人を云るへい。いつれや。[illegible]を
奏とも云ハ。あやまりしけれ。

某（ソレガシ）

祖庭事苑曰。某如其在木上。指其實
也。然猶未定以定其名。某と云字ハ。い

まことに其名をしらさるときのしるし也。名を何
ともしらぬ者とに頼皆用へし。今乃
俗。或曰某と云。禮記孝王某。
孔安國註。某名也。臣諱君。故曰某。凡不
知名者皆曰某。又臣人。其人を指さし
てその名をいふ。禰しく。某と書る人はあ
らず。書乃中に多し。自称に某とかくは何を

存命（ゾンメイ）

魏書云。僅得存命。

粗末（ソマツ）

茶を製するに。麁末（ソマツ）細末（コマカナル）乃法あり。

先より起りてすべて精細ならざる事。粗末
と云

撩 山谷水仙花詩。暗香静色撩詩句。註。
王介甫詩。物華撩我有詩句

正譌

藏六 ゆゑやうは坐する事を云。おまに詳し。即時
俗に。じやうろくと云ハ誤 そくじと云ハ誤
其撲事 そんぼくじと云ハ誤 存外 ぞんぐわい
ちやくじ。又ぢやくとよむハ誤 そんがいハ誤
續飯 ぞくいひハ誤 夫々 それそれハ誤 其方 そのはうハ誤

津 第十九

諺

月盈ば缺 易豊彖傳ニ云。日中則
昃。月盈則食。 史記蔡澤ガ云。日中則移。
月滿則虧。 釋名ニ云。月缺也。滿則缺。和
訓に
松のくもらずこつまじがやがてかくる月の
いざよふや人の世の中
角をためて牛をころすと いふハちいさき疵を
直さんとして。悪しくいへバ大なる害を求

泳吟之。郁離子曰。東門之癭人頭沒于
胛而癭代爲之元。口耳鼻耳俱不能爲
用。郢封人憐而爲之割之。人曰。癭不可
割也。弗聽。卒割之信宿而死。國人尅焉。
辞曰。吾知去其害耳。今雖死癭亦亡矣。
國人掩口而退。え角あてもとく〳〵。牛に
詠を報之。

俗語

措　笑ども又同し。漢書文五王傳
爭門措指。注。師古云。音壯客反。謂爲門
尸所笑

強顔　漢書司馬遷傳云。言不辱者所謂
強顔耳。通鑑第四十九集覧云。強顔
猶言顔厚也。今俗につきなしと訓
く安然乃ひとしせて。

無恙　事物紀原曰。演義曰。時人以無憂
疾謂之無恙。戰國策曰。歳無恙耶。王
亦無恙耶。无恙乃字九出不之。史記
刺客傳曰。爲老母幸無恙。妾未嫁。索隱

曰。爾雅曰。恙憂也。楚詞云。遝及吾君之無恙。風俗通云。恙病也。易傳云。上古之時。草居露宿。恙噬蟲也。善食人心。俗悉患之。故相勞云無恙。〻非病。神異經曰。北方有獸曰㺊。〻恙也。常近人村落入人屋室。人皆患之。黄帝殺之。由是北方人得無憂疾。謂之無恙。此其始也。廣韻にハ㺊と恙とハ各別にとせり。無恙乃説紛〻なれとも。ひとへに爾雅乃説によりて憂なしと云を可とすへし。白樂天無恙説はつきと考ふるへし（又無宅と書てつゝかなしとよむ。説文会意）

刓〻 史記黥布傳。印刓とはる

一二 文選司馬遷報任少卿書。事未易一二為俗人言也。註。翰曰。一〻二〻謂委曲也

通達 禮樂記。知類通達

塵拂 埃囊抄に云。万の遊の最初にあるをも卑下ある人つねに塵拂と云ハ。林ふ程に

蹴鞠の九會のまへ時ハあらしの賀茂人系
なく。出御以前に先蹴て庭の露
を落すを。是を露払と云。源氏蓬生
に。御先の露を。馬の鞭して払ひつ
ゝいれたてまつるとあり。是ハ人の御道を払ふ露
払と云べし。

熟(ツラツラ) 和俗に。倩の字をつらつらとよむ。さ
れど倩ハ。雇と同字なり。倶を以て人
をやとふるなり。ハ。これ義なきことなり。源

時綱か詩に。倩看新艶嬌宮月。是をもつて人ま
ハ。誤つて来るなるべし。つくづくと云も熟と同じ。和名抄よめり

追従(ツイセウ) 下学集に。追従ハ媚謟の義なり。
これいまさらのしるしにあつて源氏帚木に。
このましきものゝはかなきさまを追従し
きとのよれをひろく。つひしよう
するとはつてゐ。

通路(ツウロ) 宋史王韶傳に。斷夏國通路。

嘰(ツヾシル) 司馬相如大人賦に。嘰瓊華。註。嘰ハ食也。

説文。嘰ハ小食也。源氏帚木巻にと。つくる
と云詞あり

詰(ツマドル) 詩經註。以衣貯之。而執其衽也

襭(ツマバサム) 又云。以衣貯之。而扱其衽於帶間也

正誤

頭巾(ヅキン)つきん ツヾリキヌハ誤 冷(ツメタシ)つめたい。つんめたいなと誤 終(ツヰニ)つゐど。つゐーい。

綴衣ハ誤 つゞき 誤

諺

称 第二十

念力(チンリキ)岩を通(トホ)る 韓詩外傳曰。楚熊渠子夜行。見寝石以為伏虎。射之。没金飲羽。視之石也。因復射石。矢摧無迹。漢書云。李廣守北平。出獵。見草中石以為虎。射之。中没鏃。視之石也。明日復射之。石不能入矣。後周書曰。李遠嘗校獵莎柵。見石叢薄中。以為伏兎。射而中之。鏃入寸餘。就見乃石也。是皆念力の一

念力をもつて。岩をもとをすためし。
劉向曰。誠之至也金石爲之開。況人乎。
程子曰。陽氣發處金石亦透。精神一到何事不成
鼠とる猫ハ。爪かくれ。說苑云。君子愛口。
虎豹愛爪。古諺云。將飛者翼伏。將噬者爪縮

俗語

膧、婆黏曰膧

涅槃
心經注。涅槃乃不生不死之地。一切修行之所。世人誤以爲死大非也

年紀
宋之問詩。絕溪忘年紀

祖
史記張良傳云。良與客祖。註。伏伺也。謂狙之伺物必伏而候之。故今云祖候是也

五臨

正誤

鐃鈸(チウハチ) ちやうはちと云ハ誤。且鐃と鈸と二物也。今一物なりと思へるハあしく

諺

長居ハ恐きほなし　奈第三十一
禮記云。侍坐於君子。君子欠伸撰杖屨。視日蚤莫。侍坐者請出矣。新考
七とひ居て。人をうるさくこの倦のきハ。相手をうしなひるゝ時ハ。静まこれを尋求て漫は人を疑(ウタガフ)なりれと。列子曰。人有亡鐵者。意其隣之子。視其行步竊鐵也。顏色竊鐵也。言語竊鐵也。作動態度無爲而不竊鐵

也。俄而抇其谷而得其鈇。他日復見其
鄰人之子。動作態度無似竊鈇者こゝ
人を疑ふ時ハよろつ乃事皆盗せしと見
ゆるもの也。疑ふ。疑心生黯鬼といへるな
るへしと列子乃説に見ゆ。

名乃下虚しからん　國史纂異云。閭立
本見張僧繇畫曰。名下定無虚士
なうまことをふみてよくことをいへるに云　荀子云。
君子養源。源清則流清　新考　是流と流

事よりしるくと同し

名乃りとよるハ木乃丸　清輔奥儀抄に云。
天智天皇世につゝしみおはしまし、筑前
国上座郡朝倉山と云所に。山中に黒
木乃屋を作りて。住せしめ給ふを。
木の丸殿と云。丸木にて作れる故なり。
用心をし給ひけれハ。入くる人に名のらせ
なのりをしつゝ入くるなり。新考

奥儀抄
朝くら屋木乃丸殿にわかをれハ
天智天皇御製

えりをしけにゆかしかりしそ

媒口（ナカダチグチ）　俗に。云乃右遠多ことを媒口といふ。宋袁采世範ニ云。古人謂周人悪媒。以其言語反覆。給女家則曰男富。給男家則曰女美。近世尤甚　新考

俗語

納受（ナウジュ）　法華經化城喩品に。みえたり

難問（ナンモン）　俗に。疑問のことを称しく。難をるしいふ。白氏文集云。其間有所疑。即請更難。これを文の俗にいへとし。後漢丁鴻傳ニ使中郎將承制問難セ

形（ナリ）　枕草子に。うちとくなりかたなどつ絲ままくそはしへ。ましくようるんととほつ乞。

直會（ナヲライ）　日本紀持統天皇紀に。嘗の字をなふらひとくまけはしとよめり。

無礼（ナメゲ）　枕草子に。ふること乃なめげと。ほつ乞。うちも文字無礼に。かろがろしくさまなりけり。今俗に。なめとさるとそ乞。なめん

陰土蔵（ダラ）とも云也。これ乃たるとあるそこ。

波餘（ナゴリ） 左傳。晉童耳對楚子曰。其波及晉者君之餘也。なごりと訓ぜしも。なごり乃中略なるべし

なごりによれるといふ 歌林良材ニ云。なごりによれるといふことハ。人なきよおもふ也。

万葉 つかのゆみ松浦乃川の河瀬乃なごりによれても我恋やめや

古今 なごりにもれて。ひめやハ

ともしのぶ大川のへのふぢなみの

中（チウ）じく 俗語乃中じくハ。領承しらる詞なり。物をよ。中じくとつゞくるハ。かへりてとい詞ハ色なれバ。けして文字。歌よよむなせることよし。中じくと云なりし。俗語云つめされバ。彼乃蛇尾乃病ほきれハ也。

靡（ナビク） 漢書張釋之傳。天下隨風而靡。

謎（ナゾ） 隱語也。拾遺集よなぞくらへはするとはなる。

風俗（ナラハシ） 字義。ふ乃字の部よくらべし

乍（ナガラ）韻會、蒼頡篇。乍ハ兩辭也。禮運ノ註ニ、疏ニ、祭百神曰蜡。陸佃カ云。蜡讀曰乍。一ハ有一ハ無為乍。物之生死老少。一ハ有一ハ無。何有窮己。是之謂乍。俗に。ながらといひ。つゝと云也。辭をあまる時に用ふ。殺しは悪しとてまうくせぬはすきこ之。悪ともりひしかれと云ハ。四と行と。一ハ有一ハ無たりとへ人の言葉をいとそし指さるがまれ之。言葉なりし出まへと云ハある辭之。此類和俗文字を用るの妙也。

勿（ナカレ）俗に。人を戒しむる時に。なかれそと云。たとへバ勿乃字此義之。朱子曰。勿者禁止之謂。これはひとつとせよといふ戒る時に用ふ。萬葉集に。勿隙をなふつとそしるのこと。日本紀に。勿視をなかれそとよめり。

濟（ナス）爾雅。成也。又すの字部によくし。

国立公文書館 National Archives of Japan

正誤

中ヽ(ナカク)ハ誤　まつたく　不斜(ナヽメナラズ)ハ誤　なのめならず　地震(ナヰノフル)

なへの
る條

諺草巻之二終

国立公文書館
National Archives of Japan